

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

解夏 (げげ)

配給/東宝

2003 (平成15) 年11月20日鑑賞

<東宝試写室>

Data

脚本・監督：磯村一路

原作：さだまさし

出演：大沢たかお/石田ゆり子/富司純子/松村達雄

👁️👁️ みどころ

パーチェット病と失明の宣告。それはあまりにも苛酷な運命だった。ふるさとの長崎のまちへ戻り、「解夏」までの夏を恋人と過ごす隆之。さだまさしの原作が、美しい映像と感動的なストーリーで描かれる。さだまさしが歌う「たいせつなひと」に涙すること確実。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<パーチェット病そして失明の宣告>

主人公の高野隆之（大沢たかお）は、東京に住む人気モノの小学校教師。しかし今は、故郷長崎の実家へ帰り、母親聡子（富司純子）の元で生活していた。彼が教師をやめ、故郷へ帰る決意をしたのは、死の宣告にも等しいパーチェット病の宣告、そして失明の宣告だった。

<『マトリックス』に対極される美しい叙情映画>

2003年11月19日付朝日新聞夕刊には、映画評論家秋山登氏の『マトリックス レボリューションズ』（3部作完結編）の映画評論があった。そして、そこには『CGに物語が奉仕？』、そして『にべもない言い方が、失望するほかない凡作である』と書かれてあった。

これはすごい。ここまではっきりと新聞に書くのはかなりの勇気だ。

CGをふんだんに使った派手な戦闘シーンが長々と続くハリウッド映画の「駄作」、『マトリックス レボリューションズ』の対極にあるのが、この『解夏』という静かで叙情的な日本映画。そして登場人物はごくわずかだが人間の内面への切り込みは鋭く、本当に納得させてくれる映画だ。

<主人公とこれを支える笑顔の美しい恋人>

主人公高野隆之を演ずるのは大沢たかお。

『スカイハイー劇場版一』(03年)では、強烈な個性を持った悪党(?)を演じたが、この『解夏』では、一転して誠実で純朴な好青年の役。少しずつ視力を失っていく内面的な恐怖と現実の行動が少しずつ制約され、不自由になっていく姿を静かに熱演している。しかし、さすがに、父親のお墓の前で1人で泣き叫び慟哭する場面や優しく手助けしようとする恋人に対して「1人にしてくれ、もう帰ってくれ!」と突き放す場面などは、心が痛くなってくる。

この隆之を支えるのは、恋人の朝村陽子(石田ゆり子)。1人モンゴルまで出かけて教育心理学の研究に打ち込む、自立した研究者だが、隆之への愛は強い。

1人で長崎の家を訪れ、同居生活をしながら隆之を支える陽子の姿は、今どきこんな女性が本当にいるのだろうかと思うほど、献身的で、感動的。全編を通じた静かなこの2人のラブストーリーは、失明の日(解夏の日)が近づくにつれて次第に「深化」していく。

そんな中で遂に迎える「白い霧の中にいるようだ。でも君の笑っている姿は見える」と陽子に語りかけるラストシーンは涙を誘う・・・。

<結夏(けつげ)と解夏(げげ)>

この言葉は、故郷長崎にある聖福寺の林茂太郎(松村達雄)という老人から隆之たちが教わる言葉。林が説明するこの言葉の意味は次のようなものだ。すなわち、

托鉢生活をする禅寺の修行僧たちは、夏の始まりの日、結夏(けつげ)・(陰暦4月16日、太陽暦では5月27日)になると説法して歩くのをやめ、庵に集まる。これは生命の季節に歩いて、虫や草の芽を踏み殺してはいけないという釈迦の教えに従った習慣。僧たちは共同生活をしながら座禅を組み、お互いに犯した罪を懺悔しあうのだ。そしてやがて夏の終わり、解夏(げげ)・(陰暦7月15日、太陽暦では8月23日)の日がくると、再び托鉢生活へ旅立っていく、

というものだ。

そして、林は隆之に対し、失明するという恐怖は「行(ぎょう)」だと説明する。しかし、この辛い辛い「行」を経て失明した瞬間には、それまでの恐怖から解放される、従ってその日が隆之にとっての「解夏」なのだと説明した。

<さだまさし、そしてまた、さだまさし>

この映画の原作は、「作家」さだまさしが書いた「解夏」(幻冬舎)。

彼の故郷長崎を舞台に描いたこの原作には、当然のことながら故郷への熱い想いが満ちあふれている。またラストに流れる「たいせつなひと」は、さだまさしが作詞・作曲した曲で、さだまさしが歌うもの。あの独特の美しい高音で歌われる哀愁に満ちたメロディー

とタイトルどおり「たいせつなひと」を想う気持ちがしみじみと心に響きわたる。「天才」さだまさしの面目躍如といったところだ。

<故郷、友人、そして家族>

さだまさしの故郷、そして隆之の故郷は長崎。長崎は坂の町。だから隆之の実家があるところも坂の上。そして父親の眠るお墓はさらにその上。失明を覚悟した隆之は、光のあるうちに美しい長崎の町をその目に焼き付けておこうと考え、美しい長崎の町を歩いた。

これを案内し、小学生の頃と同じように一緒に遊ぶのは故郷の同級生。ホントに故郷の友達はいいものだ。そして、隆之の母聡子は、なぜ隆之が教師をやめて故郷に帰ってきたのかも聞かず、やさしく隆之を受け入れた。さらに隆之を訪ねてきた恋人の陽子までも。聡子もきっと不安なはず。しかしその不安を見せず、優しく隆之と陽子を見守る母親の姿。そんな優しい母親聡子を富司純子が見事に演じている。

私の故郷は愛媛県松山市。長崎とは異なるが同じように美しい町だ。もし私が隆之と同じ境遇になったとしたら、私ならどうするだろうか・・・？隆之と同じように、私も故郷の松山に帰り、友人、家族に囲まれた安らぎの中で、「解夏」の日を迎えたいと思うかもしれない、とふと考えてしまった。

2003（平成15）年11月20日記